英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程③

―多様性と明瞭性をめぐる葛藤に関する省察に着目して―

和田あずさ・ナットチー直子

1. 問題の所在と研究の目的

小学校英語教育研究の課題として、教室で実際に起こっていることへの理解を深める研究が少ない（本田他,2020）ことが指摘されている。教室で実際に起こっていることへの理解を深める手がかりの一つが、教師の語りである。小学校教師が自らの実践について語る研究には、根本・髙木（2017）や東條他（2018）があるが、いずれの研究も分析の対象は単一年度にとどまり、教師や授業実践の中長期的な変容を検討する研究が不足している。そこで第一発表者（以下、観察者）は、小学校英語教育の中核であるにもかかわらず多くの小学校教師が不安を抱えているとされる音声指導に着目し、授業実践と教師の信念が実践経験の積み重ねによってこれらがいかに変容するかを詳らかにすることを研究主題としている。第二発表者（以下、授業者）は、観察者が協力を得た小学校教師のうち、中高英語科の教員免許、英語圏での在学および就労の経験、高度な英語運用料力を併せ持つ、若手の非常勤講師である。本発表では、英語に堪能だが発音には母語の影響が表れる ALT（以下、A 先生）とティーム・ティーチングを行う中で、発音の多様性を認めようとする信念と英語らしい特徴を保った発音を重視する信念が対立し、それによって音声指導の実際の指導のあり方に授業者が葛藤を抱いていることに焦点をあて、授業者の実際の指導とその背景にある心的過程から、授業者の変容を捉える。

2. 研究方法

授業者は、授業の当日またはできるだけ日を空けずに、授業の概要と授業中に気づいたことや気になったことを授業ノートに書き留めた。また、観察者が共有したビデオ映像を参照し、授業時の思いや考えを想起して授業ノートの補足を行った。そして、授業ノートから音声に関わる内容を抽出し、カテゴリー化した。一方観察者は、2023 年 9 月 15 日 2024 年 3 月 21 日にかけて、授業者が担当する外国語活動と外国語科の授業を継続的に観察した。加えて、月に 1 回程度、観察者と授業の省察を行った。そして、省察の音声データから逐語録を作成し、解釈を行った。本発表では、2023 年度の実地調査の最初と発表直前の省察のうち「教師の発音の多様性と明瞭性の対立」に関わる語りの暫定的な分析と考察を報告する。

3. 授業ノートの分析

下表は、A 先生の発音が気になったとして、授業者が授業ノートに記録していた内容を整理したものである。

表　授業者が気になった A 先生の発音

要素	音素	語強勢の位置	強勢のある音節の長さ	連結
語句	zoo, tomato, gym	hospital, Smith, library, theater, Italy, mountain, restaurant, museum, Korea, vegetables, entrance, October	thirteen – thirty, October, team	flight attendant
計	3	12	3	1

授業ノートへの記録は授業内や授業後のごく限られた時間の中で行われていることから、授業者が気になった発音がすべて記されているわけではないが、そのような状況で記録されたものだからこそ、その内容が授業者にとって特に印象的だったとも考えられる。この表からは、授業者の関心がとりわけ語強勢や強勢のある音節長など、強勢とリズムに関わっていることが分かる。これらの要素は、和田（2022）で報告された、授業者が英語の音声指導で重視する要素と一致している。すなわち、英語音声指導にリズムが重要であるとする授業者の信念は維持されているといえる。

4. 授業者の「語り」の解釈

（1）2023 年 9 月 23 日の語り

この語りは、thirteen と thirty の発音の違いを指導する際に、これまでに授業者が行っていた、手を叩きながら上下に動かし、強勢の有無を示す方法をとらなかったことに関する授業者の省察である。

結局、（中略）やっぱりそのネイティブイングリッシュがベースの上での（中略）英語を目指すっていうふうに、なっちゃってる、部分はずっと変わらないんだなっていう。（中略）で、じゃあどこに焦点をするんだったらやっぱり私たちは、いろんな英語があっていいんだよ。でも、自分の英語、ちゃんと自分の芯を持って（中略）英語を学んで話せるようになってくれたらいいな（中略）っていう（中略）考えは変わらないけれども、（中略）もっともっといろんなことを取り入れながらやっていかなきゃいけないかなっていう。（中略）なんか結構、発音とかイントネーション、とかに私もちょっとこう動揺したりだとか、どうしたらいいんだろうっていうのがあって、結構、そこに囚われていた自分がいたんですけど、なんか、それも大事だけれども、その、うん、それと同じぐらい、やっぱりその多様性っていった時にいろんな英語っていうのが大事なのと同じくらい、結局はいろんな文化があって、その中で学ぶ英語っていうのが大事だから。（中略）自分の英語を話せるようになったらいいって、行き着くところは一緒なんですけど、なんかそこに行き着くまでの、意味合いだったりとか、なんだろう、その理由っていうのはもっとたくさんあるんだなって思いました。だからそこの、なんか幅を、子供たちにたくさん伝えたいなとは思う。（中略）だからダメだなって思うのは、その同僚としてのって、前のあの、お互いにリスペクトし合いながらっていうところもちょっとやっぱり頭に出てきたりだとか。（中略）なんか、一対私プラス生徒になる怖さというか、その、今私はそういう英語もあっていいんだよって言いたい人だし、言う立場なのに、そのほんと可視化した状態で、Repeat after A sensei.って言ってるのに、みんなでこの（ALT の発音に）合ってないやつを私がおっきい声で言うことによって、みんなも、こうみんなも肩に乗せながら一緒にやるっていうのがなんか。（中略）そのやっぱ英語の違いで、先生のリピートをして同じ英語のはずだけど、その似てる単語の時にここまで違うんだっていう気づきがあって。でも違いを出さなきゃいけない時に、あんまり違いを出して発音しない先生の英語をそのまま聞いたら多分違いはそこまで、出ないんだなっていう。私は thirteen と thirty って話すときにこう、違いがこれだけの幅とするじゃないですか。そしたら子供達に私が英語のリピートしてねって私の（発音）を（真似）さして、これぐらいにはなると思うんです。でも A 先生はもともとがこれぐらいの違いで発音されてるから。子供たちがリピートした時にこうなっちゃうっていうのが、あ、なんかこう似てる単語というか、難しいなって。で、それでこう、もうどうしようもないから、手と。リズムと、でやりたいけど、てんてんてんっていう。

冒頭には、日本の英語教育が母語話者至上主義なっていることへの批判的見解が示され、多様な英語の発音を認めたいとする授業者の思いと、英語の授業を通して多様な文化を受け入れる姿勢を育みたいとする全人教育的視点が反映されている。しかし、発音に焦点をあてた指導の際には、自らと A 先生の発音の違いに戸惑うとともに、同僚性の重視が音声指導の妨げになるのではないかとの思いを抱いていたことが明らかになっている。さらに、授業者自身が「正しい」と考える発音を児童に示すことで ALT が孤立してしまうのではないかとの懸念や、児童は ALT の発音を模倣すべきとの信念と強勢の違いの不明瞭さが意思疎通の妨げになることへの抵抗感の間に葛藤が、強勢の違いを視覚的に示す方法を「やりたいけど（できなかった）」要因になっていることが分かる。

（2）2024 年 3 月 7 日の語り

この語りは、年度末に差し掛かった段階において、発音の多様性や英語らしい発音の指導の重視について授業者が持っている考えを授業者が改めて振り返ったものである。

やっぱり（中略）一つ一つの単語をちゃんと正しく発音できる、知ってる意味が分かるっていうのは大事だよねって。（中略）やっていくにつれ、やっぱり大事っていうそこの部分がより強くなってきて。（中略）いろいろな英語があっていいっていうその根底の部分、World Englishes が話せるようになる子供たちを育てたいというのはずっとあるんだけど、そこに行き着くまでの道をもう少し、きちんと、自分の中でこう持っていきたいなっていうのがあります。で、そこの。道の中にあるものはやっぱり、ちゃんとその英語として正しい、文法もそうだし、発音もそうだし。そこがなんか、ぐねぐねになると、やっぱり、最後の目的地もぶれちゃう気がするんで。やっぱりちゃんと積み上げてきたものがないまま、いっちゃったらかわいそうだから。そこはすごい今年クリアになったことかもしれない。（中略）やっぱり、より native like、があるのかなと思います。やっぱり、やっぱり、そうは言っても。（中略）やっぱり native like English は大事だなと思うのは、

簡単にやっぱりより通じるから。私のゴールはやっぱり通じることだから、通じるのに 2 回も 3 回も 4 回も（中略）言って、あ、コンテキストでやっと分かってもらった、よりも、一回で通じてもらった方が。（中略）でも、でもです。（中略）今 hóspital って習っても hospítal になる子もいるかもしれないし、A 先生に憧れて、いや hospítal っていうんだっていう子がいても、それは否定しないです。それがいわゆる自分の英語を話せるようになったらいいよねっていうところであって。でも私は、授業で、hospítal とは言わない。だってそれは私の英語じゃないから。日本の子供たち、日本の育っている小学生に教える英語として、さっき言ったより通じやすい native like の English だし（中略）A 先生が hospítal って言っても私は横で hóspital って言ってます。（中略）一時期悩んでた時あったじゃないですか。そのいわゆる同僚性を気にしすぎるあまりに、失礼に当たるんじゃないかなとか、先生傷ついちゃうかなとか。ティーム・ティーチングをしてるパートナーとしてのことを考えると。でも（中略）やっぱり、授業の主体は子供たちだから、student 達がどう学んでくれるか、どう生かしてくれるかっていうことに重きを置く授業を作るのが私たち教師の役割だから、もちろん、それをするうえで円滑なコミュニケーションが取れるように良い同僚性を築いていくっていうのはあるけれども、子供たちの英語の英語の学びの弊害になるようなことはするべきではないとやっぱり思うから、その悩みは吹っ飛びました。

一連の語りでは、「でも」と「やっぱり」という言葉を多く用いながら、自分の葛藤を取り巻くさまざまな背景的要素に言及しつつも、自らの信念を強く提示している。「通じる」というコミュニケーションの結果の前提にある、教室での学習という過程における正確性の重視という一つの見解を見出している。その中で、単語の発音から英語音声の基礎基本を積み上げていくことを重視する信念に回帰している。また、実践経験を積み重ねる中で、小学校教師としての責任がより明確になり、「子どもたちの英語の学びの弊害になるようなことはするべきではないとやっぱり思う」という強い言葉で、発音の多様性と同僚性や ALT の尊厳などとの間での葛藤がなくなったと語っている。そして、先述の語りとは異なる、「母語話者のような発音が大切だ」という認識を示していることも特徴的である。

5. 総合考察

円滑なコミュニケーションを成立させるうえで発音を重視する信念は一貫しているが、単語単位での発音の正確性を重視する姿勢がより明確になっている。また、通じやすさの点でより汎用性が高い発音として“native like English”を重視する信念が芽生えている。さらに、授業者と ALT の発音が異なる際に、同僚性よりも児童の音声の学びを重視する点から、授業者自身が「正確である」と考える発音を示すことに抵抗を感じなくなっている。このような変容の背景には、実践経験の積み重ねにより、小学校教師としての役割が授業者にとって一層価値づけられていることがあると推察される。本発表の課題と展望として、観察者と授業者が再度語りを解釈することで、語りで表出された概念や主題がどのように授業者に再定義されるかについても考察することが挙げられる。

6. 謝辞

研究協力校の先生方と児童の皆様に、心より御礼申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 GA20K13134 の助成を受けたものです。

引用参照文献

東條弘子・アダチ徹子・坂口瑞穂・園田伊公子・山本延久・別府百合亜・齋藤匡(2018).「外国語活動及び英語授業における足場かけの機能と特徴―小中一貫連携教育での教室談話分析―」『宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要』第 26 号, 67-83.

根本康平・髙木亜希子(2017).「メンターとの対話的な省察の意義―小学校英語科担当者の成長―」『中部地区英語教育学会紀要』第 46 巻, 165-170.大石海（2021）.「音声指導のポリティクスを生きる小学校教師」『言語文化教育研究』第 19 号, 74-94.

本田勝久・田所貴大・星加真実・染谷藤重(2020).「小学校英語における研究動向―JES Journal のシステマティックレビュー―」『JES Journal』第 20 号, 351-366.

和田あずさ(2023).「英語に堪能な若手小学校教師の 英語音声指導観の変容過程①―授業者による語りの「揺らぎ」に焦点をあてて―」『JAILA Journal』第 9 号, 56-67.

和田あずさ・ナットチー直子（2024b）「英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程②―発音の多様性に関する省察的語りに焦点をあてて―」『JAILA Journal』第 10 号, 163-174.